

2 ぼっち、最高！

バニラムーンで、ほしかったヘアアクセをおこづかいで買ったあと。

前から行きたいなと思って、カヌレが人気の店によりみちすることにした。

ラズベリーのカヌレとミルクたつぷりのカフェラテを、スマホで撮影してから、新作コスメをチェックしていたら……。

「すみません、となり、いいですか？」

店内に入ってきた四人組の女の子たちに声をかけられた。

「あ、どうぞ。」

顔を上げて、飲みかけていたカフェラテを思わずブツとふきそうになった。

（ヤバ！ 小池さんたちだ……！）

となりのテーブルに座ったのは、同じクラスの小池梨花さん、それから足立さん、広

瀬さん、八木さんだったつけ……。

四人は、クラスでも一番目立つグループの一軍女子だ。

わたしとはちがう世界に生きてる『あつちの国』の人たち。

ふだん、ぜんぜん関わりがないけど、小池さんは教室で、わたしのとなりの席に座っている。

いくら変身していても、さすがにこの距離だと気づかれちゃうかも。

心配になってチラッと横目で見たら、小池さんとぼっちり目が合ってしまった。

あせって視線を外したら。

「ねえねえ、となりの子、めっちゃかわいくない？」

「ホントだ。」

「モデルだったりして。」

四人がこそこそ小声で話してるのが聞こえた。

（……え？　かわいい？　もしかして、わたしのこと……!？）

おそろおそろ視線を戻すと、今度は四人全員とぼっちり目が合ってしまった。

(はわわっ、今度こそ、バレちゃったっ!?)

あせって下を向くと、

「やっぱ、絶対モデルだよ。」

「あんなかわいい子、こんなとこでなにしてんだろうね。」

(よかった、バレてない。……けど、モデルだつて！ えへへ、うれしいな♪)

ホッとして、カフェラテを飲むふりで、小池さんたちの会話に耳をすます。

ぬすみぎきはよくないって、もちろんわかつてる。

だけど、わたしには、特定の友だちがいなくて(ちよつと話しかけるくらいの子はいるよ!?)、クラスで今どんなことが話題になってるか、よくわからないんだよね。

だから、情報収集つてことで。

「ね、水無瀬くんって、次はいつ学校に来るんだろうね。」

「ホント。せっかくあのLEOと同じクラスになれたと思ったのに、入学してから数回しか来たことないんだもん、がっかりだよね。」

「水無瀬くんって彼女いるのかなあ。」

(あ、そういえば、うちのクラスには有名人がいるんだつけ。)

わたしの通うシャルマン学園は、私立の中高一貫校。

入学してから知ったんだけど、学内には何人か芸能活動をしている人がいるみたい。

同じクラスには、LEO名義で活動をしている水無瀬怜央って男子がいる。

小さいころから子役として活動してたらしいけど、最近、ドラマや雑誌にもよく出てい

て、ネクストブレイク俳優って騒がれてるらしい。

けど、仕事に忙しいらしくて、数えるほどしか学校に来たことがない。

ちなみに高等部には、今、女子中高生に一番人気の俳優兼モデル・甲斐亜嵐って先輩も

いるようだ。水無瀬くん以上に学校に来ないらしくて、見かけたらラッキーなレアキャラ

なんだって。

前に一度、水無瀬くんが登校してきたときのこと。

変身メイクの見本にならないかと思って、授業中、自分の席からまじまじと観察したこ

とがある。

遠くから見てもまっげが長いのがわかったし、クラスの誰よりも顔が小さくて、明らかにただものじゃない感じがした。

なんていうか、全身がキラキラしていて、芸能人オーラがすごいんだよね。

しかも、あんまり学校に来てないのに、先生にあてられてもスラスラ答えて、勉強もできるといいたい。

まさに、『あつちの国』の王子様って感じ。

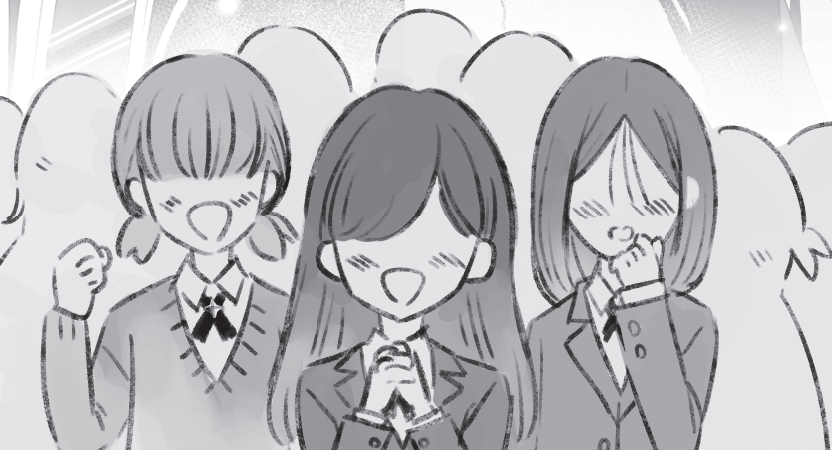
肌がめっちゃめっちゃきれいで、なんのコスメを使ってるんだろうと、つい前のめりになってしまったら、ガッシャーンと大きな音を立て、うっかりペンポーチを落としてしまったんだ。

「ひやっ、すみません。」

あわてて中身をかき集めようとしたら、水無瀬くんは席から立ち上がり、教室のすみどころがっていったわたしの消しゴムを、わざわざ拾って持ってきてくれた。

「はい、これ。」

「あ、ありがとうございます……!!」



さすが芸能人。ただ消しゴムを拾っただけなのに、めちやくちや絵になる……！

そして、いい人！

たぶん、世の中の女の子たちは、ここで「LEOくん、すてき……！」と恋に落ちるんだろうけど、住んでる国がちがすぎるわたしは「すごいなあ、あっちの国の人は。」と感心するだけで終わった。

（なるほど。一軍女子の話題って、こんな感じなんだ。やつぱりキラキラしてるなあ。）
わたしには関係ない話だったな、と納得して、またカフェラテを片手に、スマホをいじりはじめた。

そのタイミングで、小池さんが「トイレ行ってくるね。」と言って席を立つ。
すると。

「ね、梨花花って、絶対自分のことかわいって思ってるよね。」

「わかる。わたしが『水無瀬くんって彼女いるのかなあ。』って言ったら、ちよつと笑ってなかった？」

「見た見た！ 自分が彼女になれるとでも思ってたんじゃない？」

「性格悪いよね。」

残った三人が、口々に小池さんの悪口で盛り上がりはじめて、またカフェラテをブーツとふきそうになった。

（ええっ？ 今さっきまで仲良くしゃべってたのに、なんで??）

となりで聞いていたかぎり、小池さんはなにも悪いことはしていなかった。

ただ笑って、みんなの話を聞いてただけだ。

なのに、そこまで事実をひん曲げて、悪口につなげる三人のほうが、よっぽど性格悪いと思うけど。

「ごめんね。」

小池さんが戻ってきた。

「ううん、ぜんぜん！」

三人は、笑顔で小池さんを迎え入れ、なにごともしなかったかのように、またにこやかにおしゃべりを始めた。

その切り替えの早さに、

(コッワ、一軍女子……！)

わたしはとなりで、がたがた震えながら冷めたカフェラテを飲みほした。

中学^{ちゅうがく}に入学^{にゅうがく}するとき、メイクの力^{ちから}を借りて、一軍女子にもぐりこむって作戦^{さくせん}も、ちよつ

とだけ考^{かんが}えたことがある。

だけど、やめという本^{ほん}当^{とう}によかった……。

こんなにオソロシイ人間^{にんげん}関係^{かんけい}、わたしには無理^{むり}ゲーすぎる……！

あつちの国^{くに}の人^{ひと}たちは、友^{とも}だちとの関係^{かんけい}がどうしたとか、カッコいい男子^{だんし}がどうしたとか、いろいろ大変^{たいへん}そう。

やっぱわたしは、ひとりでいるほうがいいや。

だって、ひとりでいたら、めんどくさいことなんてなんにもない。

好き^すなときに好き^すなことができるし、誰^{だれ}かに合^あわせて気持^{きも}ちを乱^{みだ}されずにすむ。

ぼっち、最高^{さいこう}！